Osaka University Knowledge Archive

Title	スウェーデン語史への文献案内
Author(s)	清水, 育男
Citation	IDUN. 1998, 13, p. 89-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95707
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

スウェーデン語史への文献案内

清水育男

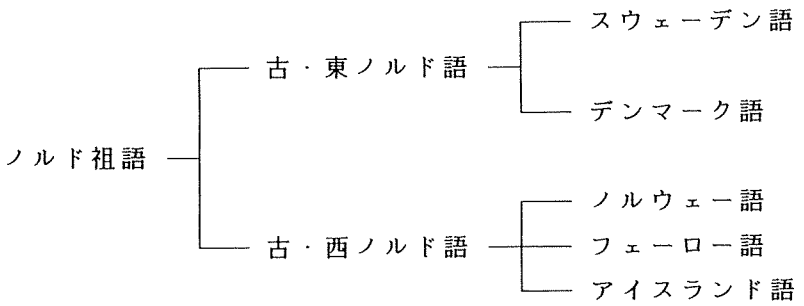
I．はじめに

スウェーデン語を日本で学習する人はさほど多くない．ましてやスウェーデン語の歴史，古いスウェーデン語を志す人はさらに少ない．この状況は他のノルド諸語についても同じことが言える．しかし，西ノルド語のアイスランド語に関しては，日本ばかりでなく外国でも，現代アイスランド語よりはむしろ古アイスランド語を志す人が圧倒的に多い．日本ではゲルマン語歴史比較文法の一環として，あるいは古英語をきっかけとして古アイスランド語を始める人が少なくないが，古・東ノルド語まで研究範囲を広げる人はきわめて少ない．確かに古アイスランド語にはエッダ詩をはじめ数々のサガなど優れた文学が資料として存在し，この分野を目指した人を飽きさせない．それに対して，古・東ノルド語にあっては法典が中心的な資料で，その他の資料としてはルーン碑文やキリスト教関係の文献，大陸ヨーロッパの翻訳文学などが大半を占め，文学的観点からは多少の退屈さを伴うことは否めない．しかし，アイスランド語，古・西ノルド語，ノルド祖語の特徴を理解するためにも，ひいてはゲルマン祖語の本質に迫るためにも古・東ノルド語の知識は必要欠くべからざるものである．幸いにも，西ノルド語のアイスランド語に関しては，詳細かつ有益な文献解題が森田貞雄著『アイスランド語文法』(東京：大学書林．1981：215-249）においてなされており，この分野への研究の重要な指針となっている．一方，東ノルド語の現代語の文法書や辞書などの紹介についても，近頃いくつか見られるようになった（たとえば，大阪外国語大学生活協同組合・書籍委員会編『辞書の紹介』(大阪：大阪外国語大学生活協同組合．1994）に収録されている間瀬英夫・新谷俊裕「デンマーク語」(101-105)，清水育男「スウェーデン語」(56-63）や池田修監修『世界を学ぶブックガイド』(京都：嵯峨野書院．1994）の当該言語の項)．しかし，古・東ノルド語の文献案内は残念ながら未だ欠けている．

そこで，古・東ノルド語の中でもスウェーデン語を中心に置いて，スウェーデン語史への文献解題を試みてみたい．

II．スウェーデン語略史

まずはじめに，ごく簡単にスウェーデン語の歴史について述べる．ノルド諸語は歴史的・系統的に次のように分類される．



しかし，スウェーデン語が一体いつ成立したのかに答えるのは容易ではない．現在でもスウェーデン語，ノルウェー語（bokmål/nynorsk），デンマーク語は大筋において相互の意思疎通に大きな困難を伴わない．この4言語は方言同士にさえ感じられることもある．したがって，これらの言語の歴史をさかのぼればのぼるほど相違は減少し，それだけにまた古風な特徴を保持しているアイスランド語とも近似してくる．しかし，ヴァイキング時代（800年頃～1060年頃）のルーン碑文に現れる，たとえば語末の母音の違い（西ノルド語 -ū：東ノルド語 -ō．現代語でも未だにこの違いが見られる．例：ノルウェー語 ku〈牝牛〉，アイスランド語 trú〈信仰〉に対してスウェーデン語・デンマーク語 ko〈牝牛〉，tro〈信仰〉）から，すでにこの時代にわずかではあるが西と東に方言的な差異が生じていた．この時代の残された資料はきわめて限られているため，もちろん確実なことは言えないが，スウェーデン語の歴史はほぼこの頃から始まったとみてよいであろう．Ⅳ章に挙げる Bergman（[12]：11-12）もスウェーデン語本来の歴史はおよそ1000年と考えている．

さて，そのスウェーデン語の歴史は urnordiska《ノルド祖語》を別にすれば，fornsvenska《古スウェーデン語》と nysvenska《新スウェーデン語》に大別される．この2時期はさらに次のように時代区分される．

1．Urnordiska《ノルド祖語》（～800年頃）

語幹母音がそのまま残っており，ゲルマン祖語に近い特徴を保持している．24文字によるルーン碑文が主要な資料で，言語は未だ方言分化に至らず均一的．ノルド祖語の末期には各種の「ウムラウト」（omljud），「語中音消失」（synkope），「母音の割れ」（brytning）が始まる．

2．Fornsvenska《古スウェーデン語》

(1) Runsvenska《ルーン・スウェーデン語》（800年頃～1225年頃）

8文字減少した16文字のルーン碑文が多数残っており，とりわけスウェーデン中央部のウップランド（Uppland）地方からの碑文が最も多い．引き続き様々な音変化が生ずる．

(2) Äldre〔もしくは Klassisk〕fornsvenska《前期・古スウェーデン語》(1225年頃～1375年頃)

この時期の主要な資料はラテン文字で書かれた地方法．格も主格，対格，与格，属格の4つが保持されて形態的には安定していた時期．ルーン文字の þ もラテン文字と共に，引き続き使用されていた．

(3) Yngre fornsvenska《後期・古スウェーデン語》(1375年頃～1526年)

宗教的な文献や翻訳が大半を占め，文字の上では þ が主として語頭で th，語中・語末では dh に取って代わられる．この時期はスウェーデン語全体が激しい変化を遂げた．また低地ドイツ語も流入し，その影響は借用語ばかりでなく語形成にまで及んだ．

3．Nysvenska《新スウェーデン語》

(1) Äldre nysvenska《前期・新スウェーデン語》(1526年～1732年)

スウェーデン語に初めて翻訳された新約聖書（1526年）や Gustav Vasa の欽定訳聖書（1541年）が重要な文献．16世紀初頭に印刷術が導入され，文章語の規範が確立され始める．Stockholm が政治的中心地となり，この地域の言語が次第に標準的な地位を占める．

(2) Yngre nysvenska《後期・新スウェーデン語》(1732年～現在)

Olof von Dalin の新聞 *Then Swänska Argus* が1732年に発行され始め，また法典 *Sweriges Rikes Lag*（1736年）も刊行された．これらは，その後の標準語の発達に大きな意味を持った．一方，18世紀後半以降はフランス語からの借用語も大量に入ってきた．さらには，20世紀後半より英語からの借用語も急増している．

Ⅲ．ノルド語史からみたスウェーデン語についての文献

Ⅱ章を踏まえて，ノルド語史の中に占めるスウェーデン語についての文献からみてゆくことにする．まずノルド語史はインド・ヨーロッパ語，ゲルマン諸語比較文法と直結している．したがって，ノルド語史，スウェーデン語史を理解するためには少なくともゴート語の知識は絶対に不可欠である．ゲルマン語歴史比較文法，インド・ヨーロッパ語の歴史比較文法の分野に関する文献情報は現在では比較的入手しやすい（また，日本語で書かれた優れたゴート語の入門書もある）ので省略し，ここではスウェーデン語で書かれ，ごく最近刊行されたゴート語の入門書を1冊挙げるに留める（ちなみに，Uppsala 大学図書館がゴート語の聖書の重要な銀文字写本 Codex Argenteus（いわゆる Silverbibeln）を所蔵しているにもかかわらず，紹介書や専門書は別としてこれまでスウェーデン本国でその入門書や文法書が一度も刊行されなかったのは不思議である）．

[1] Nilsson, Torbjörn & Patrik Svensson. 1997. *Gotiska. Grammatik, text och ordförklaringar*. Lund: Studentlitteratur. 124pp.
ゴート語を理解する上での前提的な知識の説明，文法，テキスト（現代スウェーデン語訳が付いている!），文法的注解，グロッサリーがあり，要点をよく捉えた簡潔な入門書である．

さて，ノルド祖語を出発点としてスウェーデン語が，他のノルド諸語と並行してどのように言語的に発達していったのか，つまり他のノルド諸語との共通点と相違点，その根底にある arkaism/innovation などを見極めながら（そのような際に，ゴート語，ゲルマン語歴史比較文法，さらにインド・ヨーロッパ語の歴史比較文法の知識が必要となることは言うまでもないが），これら両者の地理上の分布やその境界線がどこを走っているのか，またこれらの一連の境界線の位置に関してどのような判断を下すのかなどが重要なポイントとなってくる．そのためには，アイスランド語をはじめとする古語，現代語を含む他のノルド諸語の知識はもちろん，スウェーデンの諸方言の特徴についてもある程度心得ておく必要がある．方言には往々にして古い特徴，つまり arkaism が残っているからである．

ところで，スウェーデン語史を志す人は当然ながら現代スウェーデン語の知識が要求される．それはまず第一に，過去のスウェーデン語の到達点である現代スウェーデン語もスウェーデン語史の一部であるということ．次に，過去のスウェーデン語を現代スウェーデン語の視点から多面的に振り返るためには，現代スウェーデン語の十分なる知識が不可欠であること．さらに，もう一つは実践的かつごく当り前のことであるが，スウェーデン語史の研究文献はスウェーデン語が主体であり，スウェーデン語以外の言語によって書かれる文献は数少ないからである．また，この分野の学問は長い伝統があり，文献もそれだけ数多く刊行されてきた反面，絶版になってしまったものも多いということはあらかじめ承知しておく必要があろう．

文献を挙げる順序は特にこれといった基準は定めなかったが，おおよそ入門段階から上級へ，あるいはまず推薦書を優先的にと心がけた．文献は主要なものは挙げたつもりだが，網羅はもちろん意図していない．なお，論文関係などにも数多く優れたものがあるが，入手はなお一層困難であるので今回は取り上げなかった．

[2] Bandle, Oskar. 1973. *Die Gliederung des Nordgermanischen*. Basel und Stuttgart: Helbing & Lichtenhahn. 117pp.+23 maps.
ゲルマン祖語について言及したり，言語変化の要因を追求したりすることよりはむしろ，北欧の西部，東部，南部を中心に起きた新しい一連の言語

変化を23枚の方言地図を活用して解説し，これらの分布状況が持つ意味を考究している．スカンディナヴィア以外の出身の学者が著したにもかかわらず，内容は十分に信頼が置け，解説もきわめて明解である一方，微細にに走らず量的にも適度で使いやすい．また，それぞれの問題点についての参考文献も詳しく載せている．この分野においては，まず本書を推す．

[3] Haugen, Einar. 1976. *The Scandinavian Languages. An Introduction to their History*. London: Faber and Faber. 507pp.
(独訳：1984. *Die skandinavischen Sprachen. Eine Einführung in ihre Geschichte*. Vom Verfasser durchgesehene, umgearbeitete und erweiterte Auflage. Autorisierte Übertragung aus dem Englischen von Magnús Pétursson. Hamburg: Helmut Buske Verlag. 636pp.)
北欧語以外の言葉で書かれたノルド語の概説書としては最も詳しい．語史が主体ではあるが，導入部には文化的・地理的背景なども述べられ，入門レベルからかなり高度な段階まで使用できるように配慮されている．また，方言地図や写真などをふんだんに用いて，よりわかりやすいようにと工夫されている．節ごとに参考文献が掲載されているのもありがたい．なお，1984年に刊行されたドイツ語訳は英語版の誤りなどが訂正され，一層充実したものとなっている．

[4] Haugen, Einar. 1982. *Scandinavian Language Structures. A Comparative Historical Survey*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 225pp.
語史を中心に据え，音韻論，形態論，統語論，語彙論まで含み，それぞれの分野においてノルド諸語がいかに発達していったかを解説している．上記のHaugen [3] とはまた別の角度からアプローチしている．ノルド諸語のそれぞれの特徴を浮き彫りにしようとしているが，カバーする範囲が広すぎて，深い追求がなくやや物足りなさを感じる．しかし，表などを用いて言語変化を整理してあり，ノルド語史の全体像をつかむのには有益であろう．

[5] Holmberg, Bengt och Assar Janzén. 1963. *Att studera nordiska språk*. Stockholm: Svenska Bokförlaget. 205pp.
タイトルからはノルド語全体を対象としている印象を受けるが，中心はスウェーデン語である．本書は前半と後半に分かれ，前半は共時面を，後半は通時面を扱っているが，その通時面については大部分が音変化に費やされている．教科書としての使用を目的としているため，比較的初歩段階

の説明から始め，巻末には文献解題，論文の書き方，参考文献の挙げ方まで懇切丁寧に指導しており，私たち外国人にとっては，便利で実用的な概説書である．入門段階で一度通読しておく価値があろう．

[6] Wessén, Elias. 1979. *De nordiska språken*. Elfte upplagan. Stockholm: AWE/GEBERS. 151pp.
(独訳：1968. *Die nordischen Sprachen*. Deutsche Fassung der schwedischen Ausgaben von Suzanne öhmann. Berlin · New York: de Gruyter. 161pp.)
(邦訳：1988.『北欧の言語』新版（菅原邦城 訳）東京：東海大学出版会．200pp.)

スウェーデン語史上の細かい言語変化の説明は後述の Wessén [16] に譲り，本書では [16] であまり触れられていないノルド祖語や，各ノルド語の各時代の資料及びその背景に主眼点が置かれている．本書は Bergman [12] や Wessén [16] と相互補完的に使用するのが望ましいが，もちろんこれだけ独立して読んでもノルド語史が概観できる．著者がスウェーデン人であるためか，やはりスウェーデン語史の部分が一番詳しい．本書には幸い日本語訳があり，日本において遠い存在であったノルド語史を直接味わうことができるようになった意義は大きい．

[7] Noreen, Adolf. 1913. *Geschichte der nordischen Sprachen besonders in altnordischer Zeit*. Dritte vollständig umgearbeitete Auflage. Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner. 239pp.

Axel Kock と相対するスウェーデンのノルド語学の泰斗によるもので，ノルド語史の古層のみを扱う．内容は彼の他の著作同様，精細で常に示唆的．各節に挙げられた参考文献が古いのは出版年代から致し方のないことだが，それにもかかわらず Bandle [2], Haugen [3], Haugen [4], Wessén [6] などでは解決できない疑問に遭遇したとき，しばしばその解決の糸口を示してくれる有益な著作である．

[8] Hesselman, Bengt. 1948-53. *Huvudlinjer i nordisk språkhistoria*. Häfte 1-3 (= *Nordisk Kultur* III-IV). Uppsala och Stockholm: Almqvist & Wiksells Boktryckeri AB. 487pp.

入門書とは言えないが，方言資料を縦横に駆使し，音変化，とりわけ子音変化について著者独自の見解を開陳している．ノルド語史の全体像がつか

めた段階で読めば，きわめて示唆的で独創的な個所が多々見られるので，必ずや得るところがあるであろう．なお，最後の参考文献（bibliografi）と索引（register）は Hesselman の没後，Manne Eriksson が編集した．

[9] Vikør, Lars. 1995. *The Nordic Languages. Their Status and Interrelations.* Oslo: Novus Press. 246pp.

本書の主眼点は，ノルド諸語はもちろん北欧で用いられているその他の言語，たとえばフィンランド語，サーミ語，グリーンランド語などにも対象を広げ，それらの言語の歴史や現状を記述し，次に地理的，政治的あるいは歴史的結果による複数言語の併存状況に触れ，言語間の相互関係の実態を描き出している．その一環として冒頭の第１章，第２章にノルド諸語の歴史的背景と，短いながらもノルド語史上の重要な特徴が言及されている．

[10] Barðal, Jóhanna, Nils Jörgensen, Gorm Larsen & Bente Martinussen. 1997. *Nordiska. Våra språk förr och nu.* Lund: Studentlitteratur. 536pp.

Lund 大学ノルド語学科の４人の研究者がそれぞれ出身国別の言語を主として分担（Barðal〔アイスランド語〕, Jörgensen〔スウェーデン語〕, Larsen〔デンマーク語〕, Martinussen〔ノルウェー語〕）して成った大部の共著である．残念ながら，各章の内容は質的な差が激しく，どのような読者層を対象にしているのかしばしば疑問に思う．ノルド語史に関する章は分野によってはあまりにも初歩的な個所があるかと思うと，かなりの専門的な知識（もちろんその説明はなされていない）を前提とする個所も随所に見られる．重要な資料を掲載する配慮やノルド語の歴史を多面的かつ詳細に記述しようとする意図は十分理解できるが，取り上げる対象の多くが多分に断片的で，全体像がつかみにくいきらいがある．したがって，本書は初級段階では積極的には薦められない．

Ⅳ．スウェーデン語通史の文献

次にスウェーデン語の通史に関する文献を紹介する．

[11] Bergman, Gösta. 1973. *A Short History of the Swedish Language.* (Translated and adapted by Francis P. Magoun Jr. and Helge Kökeritz) Stockholm: The Swedish Institute for Cultural Relations with Foreign Countries. 136pp.

手っ取り早くスウェーデン語の歴史を英語で通観できる点が便利．これは下記の Bergman [12] の単なる英訳ではなく，要点を要領よくまとめた簡約版である．

[12] Bergman, Gösta. 1988. *Kortfattad svensk språkhistoria*. Andra tryckningen. Stockholm: Bokförlaget Prisma. 256pp.

スウェーデン語史を概説する入門書としては，上述 Bergman [11] の原書となった本書が最適であろう．これはスウェーデンの諸大学のノルド語学科でスウェーデン語史への導入的な教科書として使用されている．各時代のスウェーデン語の資料を挙げてその背景について言及し，それぞれの時代の発音，形態，統語，語彙，正書法，地名・人名などをわかりやすく説明している．また最後に付された文献リストは，この分野のほぼ基本的な文献を網羅している．

[13] Pettersson, Gertrud. 1997. *Svenska språket under sjuhundra år. En historia om svenskan och dess utforskande*. Lund: Studentlitteratur. 251pp.

今まで出版されてきたスウェーデン語史の伝統的な内容とは，ひと味違う記述の通史がようやく刊行されたという感がある．ただ単に音変化や形態変化を追求するのではなく，各時代の歴史的背景と言語とのかかわりにも言及したり，新しい言語学の研究成果なども取り入れて，語史を立体的に解説している．さらに，各時代のスウェーデン語を扱った辞書（下述の Schlyter [38], Söderwall [39], SAOB [40]）の使い方にも頁を割いている（226-240）．これは語史に携わるうえで不可欠な研究手順の１つであるにもかかわらず，今まで語史を扱った概説書はなぜかこの指導をおろそかにしてきたように思う．これに限らず学習者が疑問に思うであろう個所は懇切丁寧に説明が加えられている．本書で語史全体の流れは把握しやすくなったが，細部の音変化や形態変化の通時的なつながりはややつかみづらいかもしれない．この点はやはり Bergman [12] と Wessén [16] で補わなければならないであろう．しかし，今回本書の出現で，最適な推薦入門書がもう１冊加わったことは喜ばしい．

[14] Pamp, Bengt. 1971. *Svensk språk- och stilhistoria*. Lund: Gleerups. 255pp.

Wessén [16] よりは幾分簡略化されており，教科書的な色彩が強い．記述

は Wennström [15] に似て音変化，形態変化をそれぞれ全時代を通して説明する．またこの1冊に語形成ばかりでなく，Wessén [16] では触れられていない各時代の文体の特徴を説明した章も含まれている．ただ，個々の問題を追求する際には，それに関連する参考文献が挙げられていないので，Wessén [16] などで補う必要があろう．

[15] Wennström, Torsten. 1941. *Svenska språkets historia*. Stockholm: Natur och Kultur. 169pp.

説明は上記の Bergman [12] よりもやや簡単ではあるが，時代別にその言語特徴を述べるのではなく，音変化，形態変化を全時代を通して記述している．最後の章にスウェーデン語研究史が添えられている．

[16] Wessén, Elias. 1965-1969. *Svensk språkhistoria* I－III. Stockholm: Almqvist & Wiksell.

I. *Ljudlära och ordböjningslära*. Åttonde upplagan (1969). 278pp.

II. *Ordbildningslära*. Femte upplagan (1965). 180pp.

III. *Grundlinjer till en historisk syntax*. Andra upplagan (1965). 346pp.

(独訳：1970. *Schwedische Sprachgeschichte*. 3 Bde. Deutsche Fassung der schwedischen Ausgaben von Suzanne Öhmann. Berlin · New York: de Gruyter.

Bd 1: *Laut- und Flexionslehre*. 314pp.

Bd 2: *Wortbildungslehre*. 186pp.

Bd 3: *Grundriß einer historischen Syntax*. 378pp.)

ノルド語史，スウェーデン語方言，現代スウェーデン語，古アイスランド語の文法などノルド語の諸分野において優れた業績を残した Wessén によるスウェーデン語史の3部作．第1巻は上に挙げた Wessén [6] の内容を前提とし，古スウェーデン語期と新スウェーデン語期に大別し，それぞれの時代の音変化と形態変化を記述している．様々な音変化，形態変化は確かに煩雑ではあるが，実例を多数挙げ理解しやすいようによく整理されている．記述は詳細だが，きわめて明解である．語源を扱う場合は，特に第1巻の内容を細部にわたって押さえておく必要がある．第2巻は語形成の種類，本来語や借用の接辞による派生語，合成語など扱う．第3巻は統語論に関するもので，内容的には古くなってしまったという批判もあるが，例文が数多く挙げられており，もちろん網羅的でないにせよ，統語上

の主要なテーマは取り挙げられており，今なお重要な文献である．これら3巻に共通して言えることは，何よりも豊富な実例を示すことにより，分かりやすい説明を心がけていることである．また，各節の問題点には脚注に有益な参考文献が挙げられており，さらに理解を深めることができるように配慮されている．Bergman [12] と並行して，あるいは終了した段階で取り組むと良いであろう．本書の内容を十分把握し終えたら，スウェーデン語史の中で自己の興味のある分野の研究に着手する準備がほぼ整ったと言えよう．スウェーデン語通史への重要かつ必須の文献である．

上述の Wessén [16] でも音変化，形態変化についての疑問点が解決しない場合や変化そのものが取り上げられていない場合は，やや専門的になるが次の2書がその答やヒントを与えてくれるであろう．出版年代は確かに古くなってしまったが，今なおこれを越えるものはない．A. Noreen (Uppsala 大学) と A. Kock (Lund 大学) はともに同時代それぞれの学説を激しく戦わせたスウェーデン語学の最高権威である．

[17] Noreen, Adolf. 1904. *Altnordische Grammatik* II. *Altschwedische Grammatik mit Einschluss des Altgutnischen.* Halle: Max Niemeyer. 642pp.
古ノルド語文法の第2巻，古スウェーデン語の歴史文法書である．Wessén [16] では得られない音変化，形態変化の細部にわたる説明があり，たいていの疑問はこれで解決するが，同時にそれ以外の解決の糸口さえも示唆してくれる．同著者が著した下記 [18] の古・西ノルド語の文法書はその姉妹編（第1巻）で，こちらは研究者が多いためか今でも簡単に新刊（リプリント版）で入手できるが，第2巻の本書はかつて東ドイツ (Leipzig 1978年) からリプリント版（印刷の質が悪く，長音記号やアクセント記号が不鮮明な場合も多々あるので注意を要する）が出たのみで，残念ながら現在入手し難い．

[18] Noreen, Adolf. 1970. *Altnordische Grammatik* I. *Altisländische und altnorwegische Grammatik (Laut- und Flexionslehre) unter Berücksichtigung des Urnordischen.* 5., unveränderte Auflage. Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 466pp.

[19] Kock, Axel. 1906-1929. *Svensk ljudhistoria.* 5 delar. Lund: C.W.K. Gleerup. 504pp.+420pp.+268pp.+489pp.+542pp.
5巻からなるとはいえ，第4巻，第5巻はさらに2部に分かれている．巻末

の索引 (register) は Walter Åkerlund が作成した．音変化の歴史に焦点をあてた合計2384章からなる大作である．I-omljud の浸透に3段階を設定し，その第2段階にこの omljud の作用が一旦中断された「空白の時期」を想定すべきことを唱えた有名な "Kocks teori" も本書第3巻の35-39頁に紹介されている．まさに快刀乱麻を断つがごとくに音変化の原因や過程を解き明かしている．

V．スウェーデン語史資料の読本

語史の知識は上述の理論書ばかりを読んでいたのでは，名詞曲用，動詞活用はもとより，様々な音変化，形態変化，統語論，各時代の資料の文体的特徴など実践的な知識はなかなか身に付かない．実際の資料にあたる必要がある．つまり，理論書と同時に多くの資料を読むことが大切である．その膨大な資料を初学者用に要領よくまとめた読本を以下に紹介する．

(1) ルーン・スウェーデン語の碑文について

[20] Jansson, Sven B. F. 1984. *Runinskrifter i Sverige.* 3:e uppl. Stockholm: AWE/GEBERS. 201pp.
(英訳: 1987. *Runes in Sweden.* Translation [by] Peter Foote. [Stockholm]: Gidlunds. 187pp.)

著者は "Run-Janne" とニックネームが付けられたほどのルーン研究の第一人者である．スウェーデンに残る24文字ルーン碑文と数多くの16文字ルーン碑文の写真を豊富に載せて，読者にも碑文の文字をなぞれるように配慮し，さらにそれに語学的・文化的・歴史的な解説を加えている．惜しいことに，ルーン・スウェーデン語の文法や歴史言語学的な記述がほとんどない．英訳は中世北欧が専門の英国の学者によるもので，原本よりはるかに多いカラー写真を使って，読者にルーン碑文とその美しさも紹介している．

ところで，スウェーデンに残存するルーン碑文を各地方別に網羅・収録し，解説を加えた膨大な研究資料も刊行されている．

[21] Kungl. Vitterhets Historie och Antikvitets Akademien. 1900ff. *Sveriges runinskrifter.* Stockholm: Almqvist & Wiksell.

ついでながら，デンマークやノルウェー，アイスランドに残るルーン碑文も同じようにそれぞれの関係機関から公刊されている．

なお，ルーン碑文の文法書としては次の2点を挙げておく．Krause は他にもゲルマン語をはじめとする数多くの歴史文法に関する興味深い著作がある．

[22] Krause, Wolfgang. 1971. *Die Sprache der urnordischen Runeninschriften.* Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag. 188pp.

[23] Antonsen, Elmar H. 1975. *A Concise Grammar of Older Runic Inscriptions.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 111pp.

ルーン碑文に関する重要な文献は北欧ばかりでなく，その他のヨーロッパでも数多く刊行されてきた．ちなみに，上記 Noreen [17] の巻末（481-502）や下記の Gordon [24] も多少の頁（181-193）を割いて，スウェーデンに残る代表的なルーン碑文について解説をしている．

ところで，こと最近 Uppsala 大学ノルド語学科を中心に再びルーン研究が盛んになり，質の高いモノグラフを多数含む Runrön 叢書（編集者 Lennart Elmevik & Lena Peterson）が現在まで12巻刊行されていることを付け加えておく．

(2) 古スウェーデン語の読本

[24] Gordon, E. V. 1968. *An Introduction to Old Norse.* Second Edition. Revised by A. R. Taylor. Oxford: Oxford University Press. 412pp.

[25] Ranke, Friedrich. 1967. *Altnordisches Elementarbuch.* Dritte, völlig umgearbeitete Auflage von Dietrich Hofmann. Berlin · New York: de Gruyter. 205pp.

両書共に古・東/西ノルド語の入門的読本ではあるが，どちらかというと古・西ノルド語習得のために使われることが多いかと思われる．しかし，これらの後半に頁数は決して多くはないが，古スウェーデン語期のテキストもあり，[24]，[25] それぞれ英語，独語によるごく簡単な古スウェーデン語についての解説とグロッサリーも付いている．Ranke [25] にはさらにテキストの独訳も挙げられている．

[26] Noreen, Erik. 1970. *Fornsvensk läsebok.* Andra bearbetade upplagan. Utgiven av Sven Benson. Lund: Gleerups. 262pp.

[27] Wessén, Elias. 1969. *Fornsvenska texter.* Tredje upplagan. Stockholm: Läromedelsförlagen. Svenska Bokförlaget. 128pp.

ともに古スウェーデン語期の地方法を始めとする種々の領域からのテキストを収め，簡単な注とグロッサリーが現代スウェーデン語で付けられている．しかし，テキストには現代スウェーデン語訳は付いていない．ちなみに，[26] の編者 Erik Noreen は Adolf Noreen の息子である．

(3) 前期・新スウェーデン語の読本

[28] Noreen, Erik och Monica Johansson. 1981. *Valda stycken av svenska författare 1526-1732*. Stockholm: AWE/GEBERS. 199pp.

旧版は巻末に簡単なグロッサリーしかなく，きわめて使いづらかったが，この版より Monica Johansson がテキストに詳しい解説を加え，各テキストごとに難解な語彙をまとめて語釈を付すなど配慮し，はるかに使いやすくなった．ただし，テキストには現代語訳は付されていない．

(4) スウェーデン語の全時代を通した読本

[29] Kornhall, David. 1971. *Från Rökstenen till Argus. Text, kommentarer, ordlistor*. Lund: Gleerups. 94pp.

注及びグロッサリー付きで，難解な個所には部分的に現代スウェーデン語訳がある．少ない紙数ですべての時代をカバーしようとしているため，資料の種類と量がいささか限定されてしまっている．これだけでスウェーデン語史における各時代の言語的特徴がつかめるかどうかはやや疑問であるが，1冊にまとまっている点は便利である．なお，これには別冊として練習帳(studiebok. 76pp.) がある．

Ⅵ．スウェーデン語の語源辞典と各時代のスウェーデン語を扱う辞典

スウェーデン語史研究では当然ながら，語源辞典と各時代のスウェーデン語を対象とする辞典についての予備知識とその使い方をわきまえておかなければならない．(現代スウェーデン語の辞書についてはⅠ章で挙げた清水「スウェーデン語」(56-63) の中で解説を加えたが，その編集方針上，本章で取り上げる辞典などは意図的にほとんど触れなかった.)

(1) 語源辞典について

[30] Tamm, Fredrik. 1890-1905. *Etymologisk svensk ordbok*. Uppsala: Akademiska boktryckeriet. 420pp.

著者の他界により完成はみなかったが，遺稿の部分は A. Noreen により校正され，karsk の項まで刊行された．インド・ヨーロッパ諸語の同語源の語彙を呈示し，意味の変遷を追い，その記述が丁寧で説得力がある．未完成ではあるが，優れた語源辞典である．

[31] Hellquist, Elof 1939. *Svensk etymologisk ordbok*. Tredje upplagan (1966). Lund: C.W.K. Gleerups förlag. 2 band. 1484pp.

上述の Tamm [30] の語源辞典を補うことを目的に，しかし借入語や方言，固有名詞なども取り入れて Tamm とは異なる編集方針で編纂された辞典である．まず，見出し語の最初の使用年代を挙げ，音変化の詳しい説明，インド・ヨーロッパ諸語における対応語，その語源説に関する参考文献を示し，項目によっては文化史にも触れ，全体的に多くの情報を含む優れた語源辞典である．特に地名・人名が見出し語に組み込まれてその語源が解説されていることは，語源辞典としてさらに大きな価値が加わっている．ただ，A から karsk までの語源の説明については，Tamm [30] の内容がほとんどそのまま，ときには簡約化されて記述されていることが時折ある．したがって，これらの見出し語については両辞典を読み比べてみることを薦める(Tamm の解説のほうが往々にして，より詳細で分かりやすいことがある)．本書は出版されてから60年近く経っているため，現在では内容が古くなった部分もあるため，補遺が予定されていると以前から聞いているが，残念ながら未だ刊行されていない．

[32] Hellquist, Elof 1929-32. *Det svenska ordförrådets ålder och ursprung.* 3 delar. Lund: C.W.K. Gleerups förlag. 1101pp.

Hellquist は [31] の初版 (1922) 刊行後に，語源辞典とは別の観点からスウェーデン語の語彙史を扱った本書を出版した．語源辞典は各語彙をアルファベット順に検索して調べるのに対して，これは時間軸に沿ってスウェーデン語の語彙の歴史が通観できるように配列されている．第1部は arvord〈本来語〉の語源を扱い，第2部は lånord〈借入語〉を借入れ元の言語別に章分けし説明を加えている．上述の語源辞典は簡潔性が求められたためか，説明はしばしば最低限に押さえられ無味乾燥であるが，本書は関連分野を示す語彙もまとめられており，解説に有機性があり，[31] の語源辞典の説明では分かりにくい個所がここでは文章で明解に解説されている．本書を始めから通して読むのもよいが，第3部の索引 (register) を利用して，"視点の異なる語源辞典" としても活用できる．

[33] Wessén, Elias. 1973. *Kortfattad etymologisk ordbok. Våra ord, deras uttal och ursprung.* Andra, tillökade upplagan. Stockholm: Läromedelsförlagen Språkförlaget. 530pp.

本来一般向けであるため各語の解説が簡単で，専門的な観点からは物足りなさを感じるが，ときにはその短い説明の中にヒントを読み取ることもできるので，小型であっても侮れない辞典である．さらに，上記の Tamm [30]

や Hellquist [31] の語源辞典には見られない特徴は，見出し語に新語（ときには俗語も）が取り入れられていることで，これらはなかなか調べるのが難しいため，その情報は少量でもきわめて貴重である．

[34] Svenska språknämnden. 1986. *Nyord i svenskan från 40-tal till 80-tal.* Stockholm: Esselte Studium AB. 306pp.

1940年代から1980年代にスウェーデン語の語彙を豊かにした約7500語の新語を収録した辞書である．ここには当該語彙が最初に登場した年代と意味を，さらに借入語であれば可能な範囲でどの言語が源であるかをも示している．必ずしも語源辞典とは言えないが，その役割の一端は果たしているのでここに挙げた．さらに，巻末には取り上げた語彙を逆引きに並べ，利用の便を図っている．

本書は現在下記 [35] のように書名を変えて刊行されているが，中身は全く同じ．初版 [34] にあった "あと書き" が省かれ，代わりにあまり意味のないイラストが加わったために頁数が増えたに過ぎない．（ついでながら，しかし感心できないことであるが，本書以外にも初版から数年して再版を出す際，ささいな増補のみで本体の内容はまったく同じであるにもかかわらず，初版の原題さえも抹消して，勝手に（?）新しい書名に変更し，あたかも別書であるかのようにして刊行している辞典類もある．）

[35] Svenska språknämnden. 1989. *Från rondell till gräddfil. Nyord i svenskan från 40-tal till 80-tal.* Stockholm: Esselte Studium AB. 320pp.

スウェーデン語の単語を語源辞典で調べると，たいてい同語源に相当するその他のノルド諸語の語彙も掲載されている．したがって，多面的な情報や種々の説を収集するにあたっては，それらの言語の語源辞典もチェックする必要がある．スウェーデン語以外のノルド諸語の語源辞典についてはすでに冒頭で触れた森田『アイスランド語文法』(239-240) に適切な解題があるので，参照されたい．ここでは，それ以後に刊行された語源辞典を２点挙げる．

[36] Nielsen, Niels Åge. 1989. *Dansk Etymologisk Ordbog. Ordenes Historie.* 4. Udgave. København: Gyldendal. 522pp.

ノルド諸語の語源辞典の中でインド・ヨーロッパ祖語の語根再建に重心が置かれ，見出し語の語源に関する諸説については新旧様々な参考文献が挙げらている．しかもその論文や著作の当該関連個所の頁数がきちんと記載

されているため，これらの語源説を探索するとき大いに役立つ．第３版までは版を重ねるごとに，新たに提示された語源説を掲載する文献や論文，その著者名や頁数などがリストとして巻末に加わえられ，これらは語源研究にとって貴重な新情報源であったが，1986年の著者の他界をもってそれ以後の改訂が望めなくなったことはまことに残念である．なお，第４版は今まで巻末に掲載されていたこれらの文献リストがすべて本体の各見出し語の項目に組み込まれ便利にはなった．コンパクトではあるが，きわめて充実した内容である．

[37] Ásgeir Blöndal Magnússon. 1989. *Íslensk orðsifjabók*. Reykjavík: Mál og menning. 1231pp.

現代アイスランド語の単語の語源を調べるとき，それが古語にあれば，古アイスランド語の語源辞典で今まで間に合わせてきたが，新語に関しては容易に調べようがなかった．今回現代アイスランド語を対象とした本語源辞典の刊行によって，ようやくこの問題は解決される．だだし，部分的に Hellquist [31] の語源解説をそのまま踏襲している個所も見られる．

(2) 各時代のスウェーデン語を扱った辞典

前章で挙げた読本のテキストを読むにあたって，それぞれグロッサリーが付されているが，私たち外国人はもちろんスウェーデン人の学習者でさえもこれらのグロッサリーでは絶対に間に合わない．その意味で先にも述べたように Pettersson [13] が巻末 (226-240) でようやく各時代別の辞書の使い方を説明したことは，その必要性を思ってのことであろう．

① 前期・古スウェーデン語の地方法を読むにあたって

[38] Schlyter, Carl Johan (utg.). 1877. *Ordbok till Samlingen av Sweriges Gamla Lagar*. Lund: C.W.K. Gleerup. 818pp.

本書は Schlyter と Hans Samuel Collin が編纂した13巻からなる中世スウェーデンの地方法の全集のうちの最終巻で，第１巻から第12巻までの法典に出て来る語彙をすべて収録して現代語訳（と言っても，19世紀後半のスウェーデン語で正書法も現在のものとはやや異なるが）を付した辞典．この第13巻目の辞典は Schlyter 一人で編集している．説明のスウェーデン語はやや古臭いが，付された語釈は的確で，語句の説明，特に特殊な用語などには丁寧な説明がなされている．必要に応じて古・西ノルド語の対応語彙も示されている．

② 後期・古スウェーデン語の文献（つまり上述の地方法以後から1521年までのスウェーデン語文献）を読むにあたって

[39] Söderwall, Knut Fredrik. 1884-1918. *Ordbok öfver svenska medeltids-språket.* Lund: Samlingar utgivna av svenska fornskrift-sällskapet. 1347pp.

Söderwall, Knut Fredrik, Walter Åkerlund, Karl Gustav Ljunggren & Elias Wessén. 1925-1973. *Ordbok öfver svenska medeltids-språket.* Supplement. Lund: Samlingar utgivna av svenska fornskrift-sällskapet. 1149pp.

本辞典は古スウェーデン語の地方法より後の，しかし1521年より以前のスウェーデン語文献に基づいて編纂された辞典である．したがって，地方法にのみ現れる語彙は上述の "Schlyter [38] の辞典参照" という意味で，見出し語の後にイタリック体のLが付され，その説明が省略されている．言い換えれば，古スウェーデン語の文献を読むには両辞典が必要ということになる．本辞典は見出し語の後に，まずその綴りのヴァリアントを載せ，次に現代スウェーデン語に相当する意味を付し，実例はすべて出典を明記している．また，古・西ノルド語に語源上対応する語彙があればそれを示し，語源探索の一助にもなっている．北欧には量的にこの Söderwall の辞典にほぼ匹敵する Otto Kalkar の古デンマーク語辞典や Johan Fritzner の古・西ノルド語辞典があるが，質的な面や使いやすさ，分かりやすさは Söderwall の辞典のほうがはるかに上である．内容が優れていることはもちろんであるが，編集方針が現代語の辞書のそれと一致しているためか，使用する私たち現代の外国人にさえ時代も違和感もまったく感じさせない．古スウェーデン語は決して遠い存在ではないことを自ら教示しているかのように思える．

なお，本編は Söderwall 一人によって完成されたものであるが，補遺にはスウェーデン語史専門の研究者３人が加わった．

③ 新スウェーデン語の文献（つまり，1521年より現在までのスウェーデン語）を読むにあたって

[40] Svenska Akademien. 1898ff. *Svenska Akademiens ordbok (= SAOB).* Lund: Svenska Akademiens ordboksredaktion. 現在 "stå" まで刊行．

Svenska Akademiens ordbok のイニシャル（下線字）をとって，一般にSAOB「エスアオベー」と呼ばれている．Söderwall が [39] で扱った古スウェーデン語より後の，つまり1521年に書かれたスウェーデン語文献

から，本辞典が執筆された時点までのスウェーデン語文献の語彙を収録して順次刊行されている膨大な辞典．現在第31巻 "stå" まで刊行されたと聞いているが，完成までにはさらに数十年かかると見られる．完成すれば直ちに，いや最初の頃に刊行された数巻はすでに100年近くも経っているため今すぐにでも，それらは改訂が必要であろう．

各見出し語の配列は発音，語アクセント，屈折形，当該語が最初に出現する年代と出典，語源，意味定義とその実例，合成語，派生語など十二分な配慮と細心の注意をもって記述されている．

SAOB の発音表記は現行の発音表記（ここでは，菅原邦城・Claes Garlén 編『スウェーデン語基礎1500語』東京：大学書林（1987）の発音表記に基づくものとする）とは異なり，混同しやすい記号（下記参照）もあるのでその相違点は常に念頭に置いておく必要があろう．さて SAOB 方式の大きな特徴は見出し語の，①母音の強勢の位置，②主強勢のある母音の長短，③語アクセント（tonaccent）の区別，すなわちアクセントⅠであるかアクセントⅡであるか，これら三点が４から０の数字を用いて同時に示されることである．４もしくは３は主強勢を示し，２もしくは１は副強勢を，０は弱強勢を表す．アクセントⅠを持つ語は４（副強勢があれば１が加わる），アクセントⅡを持つ語は３と２が付される．主強勢を表す４もしくは３が，母音の直後に付されている場合は，その母音に主強勢があり，同時にその母音は長母音であることを示す．一方，これらの数字が子音の直後に付されている場合は，その子音は長子音であり，その直前の音節に主強勢があることを示している．言い換えれば，強勢のあるその音節の母音は短いことを表している．わかりやすい例を挙げてみよう．

	SAOB		現行の発音表記	意 味
(1)	hat	[ha⁴t] =	[ˈhɑ:t]	〈憎しみ〉
	hatt	[hɑt⁴] =	[ˈhat:]	〈帽子〉
(2)	anden	[ɑn⁴den] =	[ˈan:den]	(and〈アヒル〉の単数既知形)
	anden	[ɑn³den²] =	[ˋan:den]	(ande〈霊〉の単数既知形)

(SAOB の発音表記は実際には斜字体で書かれており，[ ] で包まれていない．現行の発音表記の [ˈ], [ˋ] はそれぞれアクセントⅠ，アクセントⅡを表すが，ここでは正確を期すために単音節語についてもアクセントⅠの記号を付した．SAOB の発音表記による a と ɑ の音価はそれぞれ現行の発音表記による [ɑ:], [a] に対応し，発音表記は現行のものとは逆であることに注意．)

(1)の例の数字の位置により母音の長短が容易にわかり，(2)の例からは語アクセントの区別が数字により一目瞭然である（最初の anden はアクセントⅠ，2行目の anden はアクセントⅡ）．非常にユニークで，わかりやすく，合理的に考えられている．

意味の定義は全体的に明解であり，ときには当該見出し語があまりにも多数の意味を有し，それが数頁にわたるときは，冒頭にそれらすべての意味定義を一望できるようにまず一まとめにして挙げ，後に実例が掲載される項目で改めて各意味定義を述べるなどきめ細かい工夫がなされている．その意味定義において，特に私たち外国人にありがたいのは，同義語を射程に入れた意味説明である．これは同義語の持つ細かいニュアンスの違いを知るうえできわめて有益な情報を提供してくれるからである．

次に語源解説について言うならば，Hellquist [31] の語源辞典はその性質上ノルド語ばかりでなくインド・ヨーロッパ祖語にもさかのぼって説明するが，本辞典はゲルマン祖語，インド・ヨーロッパ祖語の再建には向かわず，原則として実在した語形を挙げるに留まり，その枠内で手堅い語源の解説を行なっている．したがって，Hellquist [31] の語源辞典とは相互補完的な役割を担っている．ただ，残念なことに出版された巻数の後半あたりから，刊行進度を早める関係で語源の解説が少なくなった．

英語の OED と比べても内容的に決して遜色がない．使いやすさも申し分ない．スウェーデン語史とは関係なく現代のスウェーデン語を読むときにも，もちろん大いに役立つ．個人蔵書として是非座右に置いて使いたいところだが，空間と値段を考慮しなくてはならないことが難点であろうか．ところで，これだけ膨大な辞典を使いこなすには当辞典に関する知識，使い方の要領，さらに多少の慣れが必要である．幸い，本辞典には使用の手引きがこれまで2冊（下記 [41], [42]）出版されており，これを頼りにこの辞典を利用することを薦めたい．

[41] Ekbo, Sven & Bengt Loman. 1965. *Vägledning till Svenska Akademiens ordbok.* Stockholm: Läromedelsförlagen. 124pp.

[42] Lindbladh, Carl-Erik. 1996. *Handledning till Svenska Akademiens ordbok.* Stockholm: Norstedts. 94pp.

上記3冊の辞典（[38], [39], [40]）は各時代のスウェーデン語を分担して扱っているとはいえ，時代的に間隙を作らず連続していること，そして3辞典ともに共通して使いやすく，それぞれ対象とした時代のスウェーデン語へのアク

セスがきわめて容易なことなど，スウェーデン語史研究への貢献度は計り知れない．一般のスウェーデン人にとっては古スウェーデン語はあまり馴染みがないかもしれないが，現代スウェーデン語については誰でも SAOB に少し手を伸ばせば百科事典を引くのと同じ気軽さで，言葉そのものに関する豊富な情報，深い知識が容易に手に入る．SAOB をはじめとするこれら3種の辞典はスウェーデン国民とスウェーデン語を志す人にとって偉大な知的財産である．

Ⅶ．定期刊行物とビブリオグラフィー

スウェーデン語史のみを扱う定期刊行物やビブリオグラフィーは，もとより存在しない．ここではノルド語史全体を扱う学術雑誌とビブリオグラフィーを挙げる．後者には通例，注目すべきスウェーデン語史の文献名が掲載されるからである．

(1) 定期刊行物

ノルド語史やスウェーデン語史を扱う論文は北欧とは限らず様々な国から刊行される様々な学術雑誌に掲載されてきたが，そのすべてをここに挙げるのは不可能に近い．しかし，上に挙げた数々の文献から，その他にどのような定期刊行物がどこから出版されているのか比較的容易に検索できるものと思われるので，ここではその中でも最も重要な学術雑誌を1点挙げることにする．

[43] Hallberg, Göran & Christer Platzack (utg.). 1883ff. *Arkiv för nordisk filologi*. Lund: Lund University Press.

雑誌の題名のイニシャルから ANF としばしば呼称される，ノルド語史を主体とした伝統的な学術雑誌．1883-1888年まで Kristiania で刊行されていたが，その後 Lund へ移転し現在に至る．過去に数々の優れた論文が掲載されてきた．論文の他に書評もあり，新しい学問的動向がフォローできる．時代と共に編集委員は様々入れ替わってきたが，19世紀末の本誌刊行初期には Sophus Bugge, Finnur Jónsson, Axel Kock, Kristian Kålund, Adolf Noreen, Ludv. F. A. Wimmer などそうそうたるメンバーが編集に携わっていた．

(2) ビブリオグラフィー

最後に，ノルド諸語全体の文献を解題したビブリオグラフィーを以下に4点挙げる．

[44] Haugen, Einar and Thomas L. Markey. 1972. *The Scandinavian Languages. Fifty Years of Linguistic Research.* The Hague · Paris: Mouton. 183pp.
基本的な文献は大体取り上げられてはいるものの，さほど重要とは思われない文献が掲載されている一方で，必須の文献が欠落しており，文献の取捨選択に問題点が残る．また，文献名などにも誤植が多々見られるため，注意を要する．しかし本編にはノルド語学の各分野の先行研究を要領よくまとめた解説があり，重宝ではある．

[45] Haugen, Einar (ed). 1974. *A Bibliography of Scandinavian Languages and Linguistics 1900-1970.* Oslo: Universitetsforlaget. 527pp.
このビブリオグラフィーは前者［44］より圧倒的多数の文献名を挙げているが，解説はない．しかし，各文献がどの言語学部門をテーマにしているか，個々の文献名の後に付せられた略号を通して，伝わるようになっている．惜しいことに，取り上げられた文献が1900-1970年に絞られてしまっている．上限が1970年であるのは出版年度から致し方ないが，1900年より前の文献がカットされたのは，19世紀後半に重要な貢献をなした数々の論文や著作を考慮すると，きわめて残念である．

[46] Gippert, Stefan, Britta Laursen & Hartmut Röhn. 1991. *Studienbibliographie zur Älteren Skandinavistik.* (*Berliner Beiträge zur Skandinavistik.* Band 1.) Leverkusen: Literaturverlag Norden. 112pp.
本書は現在のところ古ノルド語に関する最新の文献解題であるが，取り上げられた東ノルド語の文献数はあまり多くない．

[47] Owe, Jan. 1995. *Svensk runbibliografi 1880-1993.* Stockholm: Riksantikvarieämbetet. 245pp.
前半部はルーン碑文を扱った単行本や論文をその著者名のアルファベット順に通し番号（合計1936点）を付けて配列し，しかもそれぞれの文献がどのルーン碑文を扱っているかをも明記している．後半部はクロス・レファレンスで，ルーン碑文資料［21］（［21］に掲載されていない碑文は，その他の文献）に基づく番号が付されたルーン碑文がスウェーデンの地方（landskap）別に分類され，それらの碑文を扱う参考文献が前半部で用いられた通し番号で示されている．本書はルーン碑文の良質のビブリオグラフィーとして評価できる．

上記のビブリオグラフィー以外でさらに研究文献を探索しようとする場合は，上に挙げた様々な文献の参考文献リストや，学術雑誌に掲載されてきた諸論文の著者名，タイトル，扱った語彙などをまとめて収録した索引（register）の特別号を利用するとよいであろう．

Ⅷ．終わりに

まずは上記の文献を通してスウェーデン語史の基本的な知識を身につけることから始めるとよいであろう．これらの文献にはさらに詳しい参考文献が載せられているばかりでなく，紹介した文献の中にはもうすでに十分専門的なものも含まれているので，それらを頼りに自己の研究分野の資料や論文などを見出すのもさほど困難ではないであろう．以上の他にも各時代のスウェーデン語を対象とする文法書，本格的な資料，語形成，統語論，また方言学などに関して紹介すべき文献がまだ多数あるが，別の機会に譲りたい．

スウェーデン語史研究はあらゆる言語事象の変化や語源を追求することが主体となるが，その実践的応用にはスウェーデンの地名・人名研究がある．この分野においては机上で構築された説が地理的・地形的・考古学的・歴史的・文化史的などの事象に合致しなければならないという大前提がある．そして論証・再建した語源がこれらの事実に一致したとき，語史の学問の深さと精度が実感される．

また，語史に取り組むことによって，現代スウェーデン語の成立過程がより深く理解されるばかりでなく，時代を逆にさかのぼれば，冒頭で述べたようなノルド祖語の全体的な特徴がより明瞭に浮かび上がり，同時にそれらの arkaism をしばしば残す各地の方言を対象とする方言学の重要性も，より一層認識されてくる．そして，その arkaism の本質に迫るにはゲルマン語歴史比較文法，さらにはインド・ヨーロッパ語歴史比較文法の広大な分野がすぐ目の前に控えている．もちろんスウェーデン語の歴史は言語学の領域ばかりでなく，スウェーデンの歴史，文学史，文化史など様々な分野にも連なる多面性を持った魅力ある学問分野である．

(1998-08-30)

[追記：本稿で挙げた Wessén [6], [16], [27] 及び Noreen & Johansson [28] は現在，Edsbruk: Akademitryck から入手できることを添えておく．]

Presentation av referenslitteratur över svensk språkhistoria

Ikuo Shimizu

Sammanfattning

Fornisländska har alltid åtnjutit ett stort intresse i Japan, men fornsvenska eller svensk språkhistoria har inte uppmärksammats i lika hög grad. De som är intresserade av jämförande germansk språkforskning studerar främst gotiska och fornisländska, men det är få som fortsätter med fornöstnordiska. För att få en djupare och mera balanserad bild av nordisk språkhistoria behövs inte bara kunskap om västnordiska språkdrag utan även en god kännedom om östnordiska, dvs. där svensk språkhistoria spelar en mycket viktig roll. För att öka intresset för den svenska språkhistorien ger förf. först några korta huvuddrag av detta område och därefter försöker förf. ge information om viktig referenslitteratur och samtidigt ge kommentarer till de verk som har nämnts.

Avsnitt I . Inledning.

Avsnitt II . Kort svensk språkhistoria.

Avsnitt III . Referenslitteratur: nordisk språkhistoria.

Avsnitt IV . Referenslitteratur: svensk språkhistoria.

Avsnitt V . Referenslitteratur: svenska texter under olika tidsperioder.

Avsnitt VI . Referenslitteratur: svenska etymologiska ordböcker och viktiga ordböcker som handlar om fornsvenska eller nysvenska.

Avsnitt VII . Tidskrifter och bibliografier om nordisk språkhistoria.

Avsnitt VIII . Slutord.